

焼肉もできる喫茶店

導入文 後半

男性が救急車で運ばれていく。幸い店にいた常連客の1人に救命措置の心得があり心臓マッサージを受けていたが、息を吹き返した様子は無かった。彼が亡くなるのは時間の問題だろう。搬送時、消防から警察が到着するまで全員店内に残るよう指示があった。

「あのテーブルの誰かが彼にこんなことしたんじゃないの？」

背の高い女性が呟く。倒れた男性と同じテーブルにいた人のようだ。

「おい、誰かがこいつに危害を加えたって言いたいのか？」

同じくガタイの良い男性が話す。

「私たちの中にいるはずないもんね、でも…」

きゃしゃな女性が答える。

「あの子達にだって無理なんじゃ…」

「だが確かにアイツの胸元が少し焦げてた、誰かに危害を加えられたのはうなづける」

遮るようにガタイの良い男性が話す。

「となるとアイツに手を出せる…一番怪しいのはすぐ後ろにいたあの変な髪のヤツか？」

3人の視線が工藤に集まる。

「は、俺！？ざっけんじゃねー、こっちは巻き込まれた側だっつもの」

「工藤にそんな度胸は無い、犯人なわけがあるか」

「湯川…なんかちょっと言い方がアレだけどまあアレだわ…」

「いきなり初対面のボクら疑ってくるとかあの人達大丈夫？頭砂糖でできてるんじゃない？」

「砂糖に失礼ですよ、浅見君」

「逆にあの3人の方が同じテーブルにおったわけやし明らか怪しいやんな」

「じきに警察も来るとは思うが、あいつらの証言のせいで俺達が連行されるのはシャクだな」

「まさかとは思いますが君、もしかして…」

「俺達なら白熊さんも信じてくれる、警察が来る前に犯人探しといくか」

「明智お前、良い奴だったんだな…」

「工藤、断じてお前の為じゃないからな。強いて言えば被害者の男性のためだ」

「やっぱ良い奴じゃねーか！」

こうして6人による犯人探しが始まった。外は日が傾いてなおうだるような暑さだ。

空になったコーヒーカップが天井を見上げていた。